

「大学生とアルバイト調査」結果を基にした考察 大学生生活とアルバイトの両立に向けて

玉 城 直 美

要 約

本研究では、2つの調査結果を用いてまとめた論文である。1つは本学学生に対し、2016年5月に実施した「大学生とアルバイト調査」のアンケート調査結果に基づき、学生アルバイト勤務実態を把握した。またそれに併せて、アルバイト経験で困難な環境に置かれており、これまで実際に筆者が相談対応にあたってきた学生に対し、改めて聞き取り調査を行った。先の紙面によるアンケート調査結果の背後にある、学生の考えている本音や置かれている深刻な状況把握により近づいていくことを試みた。両者を併せて分析していくことで、本学学生のアルバイトの勤務実態が明らかになり、さらに今後の大学生生活とアルバイトの両立に向けての手立ても見えてきた。

アルバイトの職種や勤務時間、時給等アルバイトの勤務実態にとどまらず、家庭の経済状況と家庭からの支援の有無、奨学金の受給の有無、学生を取り巻く環境の把握に努めた。それら調査結果を基に、現状の改善に向けた提案を検証した。最後に、教員としてできること、学内共通の課題として取り組むべきこと、沖縄社会の労働問題として取り組むべき内容について考察を行なった。

キーワード：大学生とアルバイト、ブラックバイト、奨学金、貧困

1. 研究の背景

2015年度の県内新聞社の新年紙面のトップニュースや、日常的な報道の中で大きな紙面を割いた社会問題のテーマとして「子どもと貧困」問題が挙げられるだろう。本テーマは、子どもという以前に親の収入の低さ、子どもの進学や進路にも大きな影響を及ぼしていることは、連日の報道で明らかになっている。2015年時点で沖縄県内の高校生及び対象者が大学に進学する学生割合は39.8%（全国平均は54.5%）となっており、大学に進学している学生やその家族が経済的にも安泰であるかといえば、多くの学生が奨学金を頼りに大学に進学している。沖縄の平均収入が全国平均と比較しても低い水準であり、大学の学費を外部の支援を一切得ずに進学させられる家庭はほんの一握りであるといえよう。

多くの学生は、入学時に期待を膨らませ学業に対する意欲、目的意識を語る。併せて学費捻出のためのアルバイトとの両立を誓うことも耳にする。努力して進学した大学生生活を維持していくためにも、お金を稼ぐ時間の確保は学業の時間同様、多くの学生にとって重要であるといえるだろう。

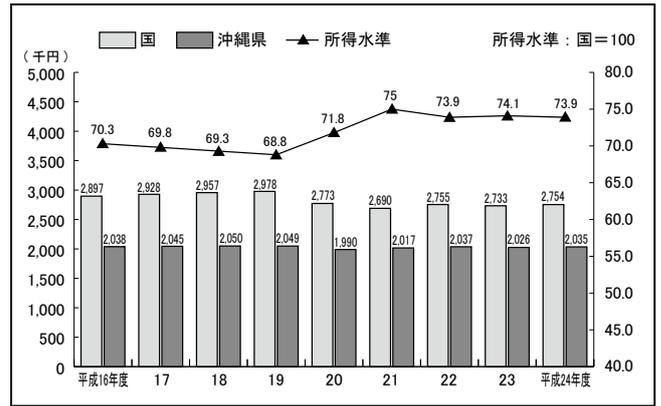
2013年頃より、「ブラックバイト¹⁾」(大内2013)という言葉が世の中で使われ始め、筆者も本学で担当している「国際人権論」の中で、本テーマを取り上げた

ところ、学生の反響が非常に高く、授業を終えても議論が止まなかった。過酷な環境の中で学業に明らかに支障が生じている状況、県内ブラックバイト先を知りたい、具体的な対応策を知りたい、何をもってブラックというのか知りたいという意見が次々に寄せられた。それ以来、連続で本テーマを取り上げるようになり、本研究を継続する経緯につながっている。

授業やレポートの中で学生の語る実態は、「クリスマスケーキの名前の記入を間違え、定価の7割で買い取ってその日のアルバイト代が殆ど消えていった」「サービス残業4時間させられても店長に文句が言えない」「繁忙期に授業を無理やり休まされた。深夜に仕事を終えて車で仮眠をとり朝の授業に遅刻はしないようにしている」など、次から次へと不当な扱いを受ける学生のアルバイト勤務実態が浮かび上がってきた。寄せられる被害実態の深刻さに加えて、学生自身が不当な扱いを受けているという認識の低さ、その対応や改善に対しての知識等もほとんど持ち得ていないことは、状況改善へつながらないと感じた。

一方で、教える側の教員の間では学内のFD会議等で、学生の学習時間の確保が厳しい状況について何度も話し合われてきた。特に本学は英語コミュニケーション学科であり、語学の定着には日々の積み重ねが必要不可欠であるのに、その時間が取れていない。学

生の日常を見てみると、午前中の授業への遅刻が多く、補講等、土日を利用した授業がままならない実態など、アルバイトとの相関関係があるはずであると多くの教員が実感している。どのように学生は働いているのか、学生を取り巻くアルバイト勤務状況の把握は喫緊のことではないかと感じ、筆者が授業やその他学内で行ってきた調査および学生へのインタビューを併せて比較をしながら、本学としての実態把握、今後どのような対応が可能かという提案まで含めて、まずは第一弾として本研究をまとめた。



出典：沖縄県統計課

図1 2012年度県民経済計算

2. 大学生生活とアルバイトの両立

具体的な事例および実態の数値を知る意味でも学内調査を行うことが必要であり、以下の調査を行った。

- ① 調査内容：大学生アルバイト調査
- ② 対象者：本学1年次、2016年5月18～20日開催の新入生オリエンテーションキャンプに参加した全員約115名に紙面にて配布し、回答者52名(有効回答)となった。
- ③ 調査方法：2016年5月20日オリエンテーションの講義の時間内で、15分程の時間を設定し、各自記述してもらい回収した。回収後、「学業とアルバイトの両立について」筆者より講義を行った。
- ④ 結果：1. アルバイト勤務先、2. 居住地と勤務地は同じかどうか、3. 勤務経験年数、4. 求人を見つけた方法、5. アルバイトの平均労働時間、6. 1週間当たりのアルバイトの回数、7. 職場の正社員の数、8. これまでのアルバイト経験、9. アルバイトの時給、10. 奨学金借用の有無、11. 親からの学費支援の種類、12. 家計を助ける必要性、13. アルバイトと学業の両立、14. アルバイトを通して得られるすぐれた経験、15. アルバイトに対する具体的な不満・困った事例。

ここでは、本学で行った学生への調査と、現在沖縄県から発表されている所得関連統計等を活用し、学生および、彼らの家族やさらに沖縄の経済や雇用環境を併せて分析した結果をまとめている。限られた紙面構成となっているため、学生への調査結果は、奨学金やアルバイト等、多様な資金を得ながら生活している実態、アルバイトの職種、勤務時間等を中心に掲載した。

図1にあるように、本県の給与体系は、全国所得平均の73.9%に留まっている。平均所得は、2012(平成

	(千人、%)	
2016年1月	実数	割合
役員を除く雇用者	562	—
正規の職員・従業員	328	58.4
非正規の職員・従業員	234	41.6
パート	91	16.2
アルバイト	51	9.1
派遣社員(事業所から)	7	1.2
契約社員	54	9.6
嘱託	13	2.3
その他	17	3.0

出典：労働力調査(沖縄県企画部統計課)

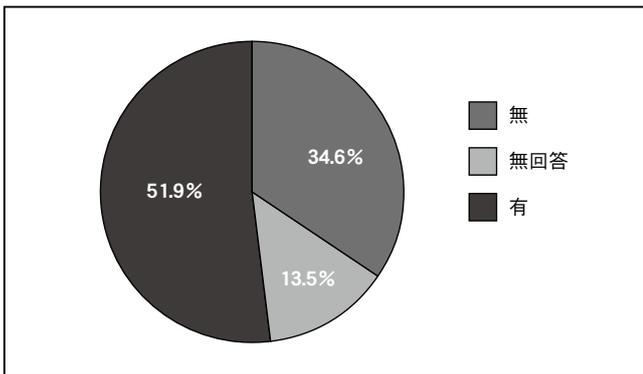
表1 沖縄県雇用形態別雇用者(2016年1月分)

24)年度は200万円強の所得になっており、さらに、その労働力の雇用形態に関しては、表1にあるように、沖縄県の正規職員は58.4%に留まり、非正規職員・従業員の率は41.6%に上っている。4年間で本学大学の入学金・授業料合計3,508,640円(2016年度入学者の総額)を各世帯が捻出していくのは容易ではないことがこの両者のデータを読み解いても理解できる。本学では、入学前の高校生に対して年に3回ほどオープンキャンパスを開催しており、そこで個別の相談コーナーを設けているが、多く寄せられる質問の一つが奨学金制度である。例え少額であっても、どのような内容のものがあるのか、詳細を尋ねる学生やご家族の様子が見受けられる。入学を希望する学生の多くは、学びたいという大きな期待と同時に、学費を捻出するために、奨学金やアルバイトで得られるお金の配慮をせざるを得ない現状がある。

本学学生のアルバイト勤務実態はどうなっているのか、親の所得だけに頼らず自分自身も働かざるを得な

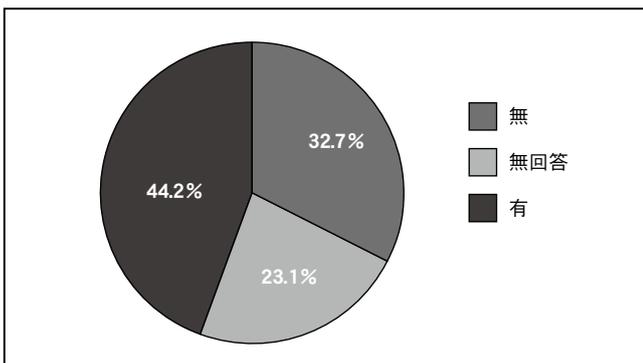
い現状は、図2の奨学金借用の有無、図3の家族を支える必要の有無、図4の家族からの金銭的援助の有無を見ると容易に理解できる。

図2より、奨学金借用の有無の結果について、1年次の5月の時点で半数以上51.9%の学生が奨学金を借りている。さらに、前期のこの頃は、時期的にまだ奨学金の申請を始めていない学生もあり、これから申請を始めるという学生も数名おり、奨学金を借りる学生の割合はさらに増えることが予想される。



有	無	無回答
27名	18名	7名
51.9%	34.6%	13.5%

図2 奨学金借用の有無²⁾



有	無	無答
23名	17名	12名
44.2%	32.7%	23.1%

図3 家族を支える必要の有無³⁾

図3より、家族を支える必要の有無について、経済的に家族を支える必要のある学生は44.2%となっている。アルバイトの給与を親の収入の補充として家庭へお金を入れている学生もいる。または親による金銭的な就学支援が厳しいため、学費等を自身で捻出していることが、家族を支えているという意味に捉えての回答になっているようだ。

	人数(名)	割合(%)
時々資金援助のみ	10	19.2
授業料のみ	5	9.6
入学金・授業料	10	19.2
入学金・授業料・時々資金援助	3	5.8
入学金のみ	5	9.6
全くなし	2	3.8
無回答	17	32.7

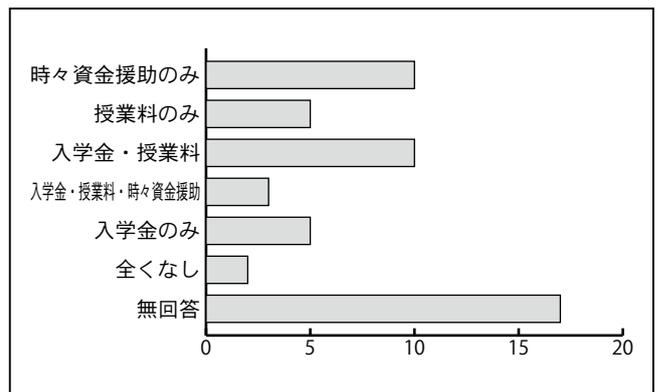


図4 親からの金銭的援助の種類(複数回答可)⁴⁾

図4より、親からの金銭的援助の種類について、入学金・授業料・資金援助(生活費)を、親の支援によって学業を成り立たせているのは、わずか5.8%である。多くの学生が学費、授業料、どちらかを、または幾分かを家族から出してもらい、残りの費用を、学生のアルバイトと奨学金の両者を併せて捻出している。さらに本学の学生の特徴として、留学を目標として入学してくる者が多いといえるだろう。この状況に加え、更なる留学費用の支援は家庭から期待できず、留学準備に併せてアルバイトを始め、勤務時間や回数を増やす学生の存在に気づいてはいるが、今回のデータからは実態として見えてこないのが今後の追跡調査として見ていきたい。

	人数(名)	割合(%)
コンビニエンスストア	6	11.5
ホテル業	2	3.8
飲食・喫茶・ファーストフード	10	26.9
居酒屋	3	5.8
事務受付	1	1.9
塾・家庭教師	5	5.8
小売業・スーパー	7	13.5
派遣スタッフ	2	1.9
遊技場	1	1.4
何もやっていない	11	21.2
無回答	3	5.8

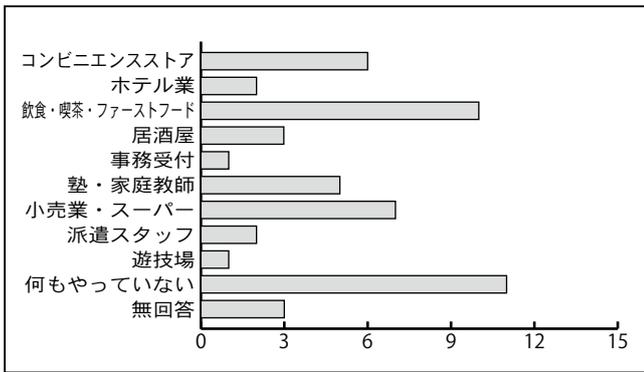


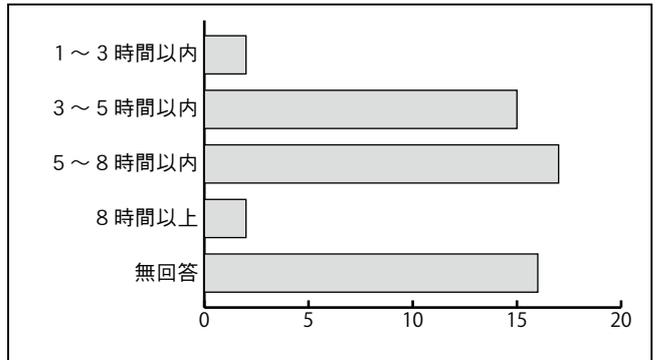
図5 アルバイトの勤務先業種

図5より、アルバイトの勤務先業種について、多い順に挙げると1、飲食店・喫茶店・ファーストフード、2、コンビニエンスストア3、小売業・スーパーとなり、上位3つの勤務先で50%を超えている。県内の身近な職場としてこの勤務先が多く存在していると言えるだろうし、大学の近くで多くの学生が勤務しているところから見ても職務経験が少ない大学生が気軽に始められる職場ともいえる。

図6より、1回あたりの平均労働時間について、最も多かった時間帯が5～8時間勤務の学生であり、32.7%となっている。まだ1年次前期の早い時期に多くの学生が長時間のアルバイトに従事している実態がある。

一方で、本学科は英語の課題が多く出されるため、学生自身アルバイトとの両立を不安視し、アルバイトを制限しているという声も多く上がっているが、多くの学生の特徴として学年が上がるにつれて、勤務時間はさらに伸びていくため、今後も学年が変わった後の追跡調査も必要であると筆者は考える。

	人数(名)	割合(%)
1～3時間以内	2	3.8
3～5時間以内	15	28.8
5～8時間以内	17	32.7
8時間以上	2	3.8
無回答	16	30.8



	人数(名)	割合(%)
1回	3	5.8
2回	6	11.5
3回	12	23.1
4回	11	21.2
5回	4	7.7
無回答	16	30.8

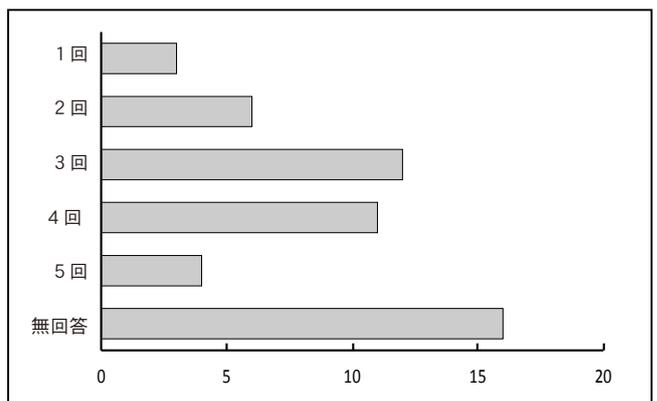


図7より、1週間あたりのバイトの回数について、1週間に3回以上勤務している学生が55%に上っている。多くの学生の職場はアルバイトやパートタイムの主婦で構成されている場合が多い。先の図6にみられるように、多くの学生の勤務時間が5～8時間である。勤務先では、パートタイムの主婦らが勤務を終えた後に、学生が入れ替わりで5時間以上働くことになる。学生は、平日であれば授業を終えて夕方6時前後

くらいから閉店の深夜12時前後までの勤務、休・祝祭日であれば午前中から8時間労働を行う学生も多い。

先の表1でも触れたように、本県の半数の就業者が非正規労働者である。早朝から昼間、夕方までの時間帯を主婦や若年層を中心とするパートタイマーで構成され、夕方から深夜帯を支える大学生のアルバイト就労者として働き、沖縄の産業を支えていると思われる。高校生よりも深夜勤務が可能となり、能力も高く、行動範囲の広い大学生は、就業先の深夜時間を支える大きな戦力になっていることは間違いないといえるだろう。この調査結果および、社会的な構造は本県にとどまらず、大内ら(2014年)の研究によっても、日本全国同様の結果が得られており、日本社会において、大学生とアルバイトの両立をし辛い環境が広がっている。

	人数(名)	割合(%)
はい	28	54.9
いいえ	7	13.7
無回答	16	31.4

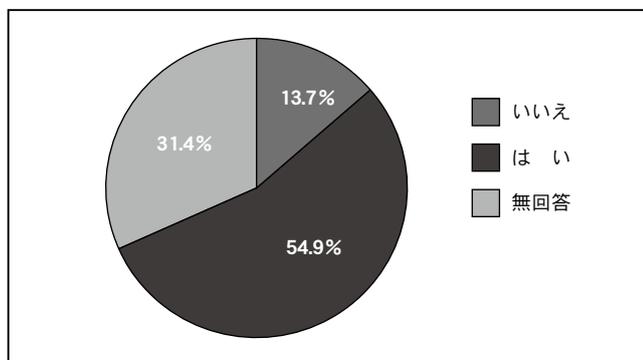


図8 アルバイトと学業の両立はできているか

図8のアルバイトと学業の両立より、大学1年次でアルバイトを始めた学生の54.9%は、アルバイトと学業の両立はできていると考えている。

しかし、両立はできているとしながらも、アルバイトを通して学んでいること、またはその経験の中で不満や不安に思っていることを回答してもらうと、両立できていると思っている学生でもアルバイトに対する不満等は少なからず挙げてくる。

アルバイトを通して得られるすぐれた経験、アルバイトに対する具体的な不満、困った事例等、両者を記述

	実際に得られたり、学んだりしている経験
①お金等	お金を稼ぐことが分かる／お金の大切さ／安く品物が買える／食品等もらえる／まかないが食べられる
②社会のルール	多様な視点を身につける／忍耐力／責任感／積極性／協力しあうこと／情報収集／人間関係が広がる／片づけの習慣
③接客マナー	接客対応／気遣い／声掛け／感謝の気持ち／身だしなみ／言葉遣い／敬語の使い分け／おもてなしの心／子ども～お年寄りまでの接し方

出典：2016年沖縄キリスト教学院大学1年次「大学生アルバイト調査」結果を基に筆者編集

表2 アルバイトを通して得られるすぐれた経験

	具体的な不満事例
①勤務に対する不満	労働時間が長い／最長15時間勤務／深夜0時以降にしか終わらない／仕事がきつい割に待遇が悪い／拘束時間が長い／休みが少ない／休みの希望が通らない／休憩が少ない／契約内容と実際の勤務実態が異なる／忙しい時に自分と新人の2人で回すことがある／人が少ない／酔っ払いの接客／アパレル系の職種で服を買わされる
②体力面に対する不満・不安	疲れる／たばこの煙
③その他	店長が時間にルーズ／エアコンが効かない

出典：2016年沖縄キリスト教学院大学1年次「大学生アルバイト調査」結果を基に筆者編集

表3 アルバイトに対する具体的な不満

式で回答してもらうと、上の表のようにまとめられる。

表2より、アルバイトを経験している多くの学生が、お金を稼ぐという目的のために勤務を始めているが、大半はその目的以外の社会のルールや、接客マナーを身につけ、社会に出る前に有益な職業訓練につながっていることを、回答している。

表3より、具体的な不満からは、アルバイトに携わって日が浅いのに関わらず、辛い勤務の実態が見えてくる。健康被害・不安、人権に関わる事例など心身の健全な状態を脅かす事例、これでは授業に集中できない、遅刻や欠席が増える、課題などをこなす時間の欠如、大学でのよりよい学びの定着は容易ではないだろうと想像できる。また補講やフィールドワーク等、

授業外の活動等、学内の行事であってもアルバイトを優先し、不参加となるケースもあるだろう。

本学学生にアンケートや聞き取り調査、授業で取り扱う以前は、学生自身のアルバイト勤務が「ブラックバイト化」しているという実感は殆どない。しかし、現在では沖縄に限らず日本全国津々浦々、全ての大学においてブラックバイトは共通課題の1つといえるだろう。大学生自身、高等教育を受け、体力があり、お金の必要性に迫られ、時間の融通が利き、ある程度従順であるという雇用者側からすると非常に優秀な人材であるはずだ。しかしその大学生の働く環境が劣悪で、労働と心身そのものが搾取されていく構造、まさに働く環境がブラックバイトとして成り立っているのが現実である。

以下表4にはブラックバイトの特徴が示されている(今野、2016)。本学学生の働く勤務形態及び具体的な不満事例を一つひとつ照らし合わせてみるとブラックバイトの特徴の多くが当てはまる。学生にも授業や特別講義等で互いの事例をピアカウンセリング形式で検証しあうと、多くの学生は自身のアルバイトがブラックアルバイトに近い状況であると気がついていく。

分類	特徴	構図
A 学生の「戦力化」	① 自分がないと職場が回らない ② 過重な責任 ③ 長時間・深夜勤務・遠距離へのヘルプ ④ 急な呼び出し、シフトの強要	職場で「戦力」として扱われ、労働者のような生活になっていく。
B 安く、従順な労働力	⑤ 最低賃金割れの賃金、残業代不払い ⑥ 偽装求人 ⑦ 罰金、ノルマ、自腹購入	「学生」「子ども」として扱われ、法律通りの給与が支払われず、上下関係で支配される。
C 一度入ると、辞められない	⑧ 責任感から辞められない ⑨ 契約違反・損害賠償で脅す ⑩ 強迫、暴力	辞めたいと思っても、上下関係や暴力を利用し、辞めさせてもらえない。

出典：「ブラックバイト 学生が危ない」(岩波新書)2016年 今野晴貴

表4 ブラックバイトの特徴

3. 本学学生の勤務実態(聞き取り調査による記録)

先の章までは、本学の学生へのアンケート紙面により調査を行ってきたが、紙面では見えない状況を理解するために聞き取り調査を行い、さらなる把握に努めた。以下、3つのケースを記載する。①小売・スーパー業務、②大手フランチャイズ飲食店、③塾講師である。この特徴は他の学生へも顕著に表れている特徴の一つである。本聞き取り調査は、筆者がこれまで相談対応にあたってきた学生で、自身がブラックバイトの環境に身を置いていた・いることを自覚している3年次以上の学生を対象とした。

3.1 県内資本スーパーで働くAさんへの聞き取り

2015年の昨年度、本学生は長時間勤務に加え、体調不安、課題等を提出できずに学業不振につながっていった。その為、面談を通してその理由を詳しく聞いてみると、長時間のアルバイト勤務、土日の殆どを8時間近く働いていた。その後、筆者授業等でブラックバイトの問題に触れ、ブラックバイト診断をチェックシートで行ってみると自身の働く環境そのものがブラックバイトであることを知ってショックを受けたようだ。その後、アルバイト環境の改善に努めた経験を持ち、現在では学業との両立が可能となり、アルバイトと学生生活の両立につながっている。

Aさんの勤務する場所は、県内大手スーパーであり、継続勤務は3年を超えている。3年次の頃の最も厳しかった状況を記録する。因みにこのアルバイト先は、給与明細、年休・有給等、時給の設定(深夜割増等)、交通費等に関してはしっかり管理されており、Aさんも特に不満はなく、ほかのアルバイト先より恵まれていると感じていた。アルバイトおよびパートタイマー間の人間関係も非常に良好で、勤務形態のきつさ以外に問題を感じないという意見であった。

そのアルバイトを選んだ理由については、家や大学からも近く利便性も良かったためである。何度か辞めることを考えたけれども全ての条件をみても同じような場所はないと判断し、改善を進めながら現在も勤務している。Aさんは母子家庭で育ち、他の兄弟のことも考え、母親に負担を掛けないように考えてアルバイトを始めたようだ。

(勤務形態について)

- ・1週間のアルバイト日数は4～5日、平日は授業を

終えて夕方5～6時の時間帯から閉店の22時半又は23時までで、週末等の休日は5～6時間の勤務形態になっている。契約以外の日でも、当日、人手不足で出勤してほしいと学生の携帯電話へ担当者から電話が掛かってきては勤務が増えていく現状があった。また学業や私用で休みを取る際にも、可能な限り代わりの人を見つけてくる仕組みになっていた。

- ・同じ場所で働くアルバイト学生の中には7連勤の現状があり、これでは単位取得、今後の実習に向けての課題を仕上げられないとつぶやくものもいた。
- ・辞めたいと伝えても、年末の忙しい時間を終えるまで待つてほしいと、辞める期間を延長させられる状態を多くのアルバイト学生が経験している。

(契約とは異なる働き方)

- ・当初、飲食のこの範囲と決められていたのに対して、やったことのない場所をその日から殆んど研修なしに担当することがある。
- ・これまでレジを最後に閉めてお金を管理するのは正社員の仕事であったのに対し、アルバイト学生も担当するようになるとのこと。

上記の契約とは異なる働きに関しては、経費削減に伴う人員の配置が行われないという前提であると学生は聞いている。

(その他)

- ・上層部の正社員から受けるパワーハラスメントに近い対応により、精神的に苦しくなる時間を過ごした経験がある。
- ・接客を専門としている職場にも関わらず、アルバイト学生だけでその場を回していることがあり、責任の所在が分からないことがある。

3.2 全国フランチャイズ飲食店で働くBさん

Bさんは、全国フランチャイズ飲食店の店舗1か所と、同業種の個人営業の店舗1か所の掛け持ちのアルバイト生活を送っている。聞き取りの結果、問題点が深刻である全国フランチャイズの飲食店を記録する。

親元を離れ、親戚の家から大学に通うBさんは、学費は親からの全額支援のため、生活費やその他のお金をアルバイトで稼ぐという生活をして約3年を迎えている。

なぜアルバイトを掛け持ちでするようになったのか、当初働いていた全国フランチャイズ飲食店の勤務

が週2回程で、希望のお金を稼ぐことができなかった。もう1つ類似した業種のアルバイトを入れて週に4～5回勤務を希望していたが、気が付いてみると現在では、2か所の勤務合計が週に6～7回となっているようだ。

(勤務形態について)

- ・大学生の勤務時間は、主婦のパートが不在となる夕方の時間帯から閉店(深夜12時)まで6～7時間を勤務している。閉店してから戦場のように片づけ、次の日の開店のための食材準備、店内清掃、在庫整理と、一刻の猶予も許されない時間を過ごす。しかし、12時勤務終了厳守の決まりがあり、正社員の対応によって、12時以降の勤務に関しては残業代が付かないこともあり、日によってはそのサービス残業が深夜2時前後まで続く。
- ・働いている間のプレッシャーは他に例をみず、それが好きでこのアルバイトを選んでいるものもいる。能力主義という徹底した勤務形態で、4か月に一度の面接、目標の達成チェック、評価等もあり、アルバイト、パートタイマー全員がランク付された階級が設定され、ここで働くものは誰もが向上心を持って上を目指すという雰囲気がある。

(評価につながる見えない勤務)

- ・季節ごとに新商品の出る飲食店であるため、名前、作り方、カウンター等におけるポジションなど、覚えることが山のようにある。それを勤務外にアルバイトの控室を訪れ、マニュアル本に目を通して覚える。その暗記と実際の勤務は評価の対象となり、業務の一環である。その時間に関しては完全に無給であり、マニュアル本を持ち帰って覚えることも許されず、必ず控室にて勤務時間外という決まりである。本アルバイトは、勤務3年目にして760円となっているが、サービス残業、マニュアルを覚える時間を換算すると時給がそれ以下になることはわかっているが、それを悪くいう雰囲気は殆ど存在していない。
- ・サービス残業、時給にならない勤務があることはアルバイト生の中でも話題に上るけれど、ここでしか働けない価値観がある。仕事ができないとここにいけないという自意識がある。また全ては「お客様」もしくは次に働く仲間のために私の時間と労力を与えろという意識、そこに「お金」という価値観はあまりよぎらない。「お客様ファースト」の精神が職場の社

風となり、それが売りでもある。

- ・コンビニエンスストアの格安の同商品を、こちらでは付加価値をつけて販売する。そこに仕事という意識よりも「美学」を追い求める社風がある。

(アルバイトと学業両立への危機感)

- ・ブラックバイトに関する授業を受講後、自身の勤務先がこれまでしっかりしていると思っていたけれど、自分もブラックバイトの中にいると気が付いた。一つの目標に向かっていく気持ち、チームとして働く連帯感から抜けたくないという気持ちがある。もしかしたら、そうになってしまう雰囲気、自身のマインドがコントロールされている環境そのものに問題があるかもしれない、そう考えると怖くなる。ただ、他に時給が高く、割のよいアルバイトがあることは知ってはいるが、このアルバイトを辞めたら、達成できない何かがあるので今すぐ辞めようと思うことにはならない。

3.3 塾で働くCさん

Cさんは、教職を学ぶ傍らで、もっと教える技術を身につけたい、そしてお金を稼ぎたいという両者の意識により塾のアルバイトを決めたようだ。またその頃、アルバイトの面接にいくつも落ち、求人情報誌にはこの予備校の情報が常に載っており、そこが人材不足で確実に取ってくれるだろうという思いもあり、広告だけを頼りに勤務し始めた。しかし働いて3か月弱でその仕組みのおかしさに気が付き、すぐに辞めることを決意し、Cさんは試用期間で辞めている。試用期間が終わったら時給が1000円程になるようだが、Cさんは試用期間であったため、時給は800円程度であった。

(勤務形態)

- ・給与形態は、コマ給⁵⁾の形態であり、授業を1コマ(60～90分)教えて800円くらいだった。1回で2コマ、週に2日程の勤務により、毎月の給与が1万円弱であった。
- ・1日、2コマ持つ前、必ず2時間前に出勤し、勉強会という名の模擬授業を正規教員や塾長の前で行い、指導を教授される時間があった。そこは強制参加であるが、名目は勉強会であり、時給は発生しない。当然であるが、その勉強会の前には、別の場所で勉強会のための教材研究を行うことも必要であった。

- ・勤務を終え、他の先生方、アルバイトの最後の授業を終えるのを待ち、塾の教室の清掃を全員で行い、今日を振り返る反省会を終えて帰宅となる。塾は10時には授業を終了するが、退勤は深夜11時～12時となり時給は発生せず教えるコマ以外は全てサービス残業である。

上記の内容をまとめると、Cさんは1日7時間ほどの拘束を受けるのに対して、2時間分の時給しか支払われていないことになる。

(職場の雰囲気)

- ・生徒の成長を第一に考える雰囲気、人を大事にという姿勢があり、生徒との関わりを重視することを求められた。職員室にいて授業の準備をするのではなく、その時間も生徒との関わりをする、最後の掃除の時間を待つ間もサービスで生徒の面倒を見るという仕組みが自然と出来上がっていた。
- ・勉強会という名のサービス勤務、研修会(1回、数時間参加して500円の支給)や教員同士の飲み会が何度も行われ、教授法の向上、生徒優先主義が徹底していたように感じる。

(ブラックバイトであるという意識)

- ・給与の発生する時間より、サービス残業や準備の時間が多く割かれ、働く日数、時間が僅かだった。働く教員というより、掃除担当と教員両方を格安で確保する形態だと思った。
- ・反発できる、何かが違うと思ってもいえる雰囲気ではなかった。無駄な時間を過ごしている感じで、いくらここにいっても成長しないと感じた。

4. 現状の改善に向けて～大学生のアルバイトと学業への両立に向けての提案～

現在、アルバイトに就きながら通学している学生だけでなく、長期休学をしている学生、学業不振、体調不良の学生の中にはアルバイトによって引き起こされた課題を一人で抱えている学生も少なくない。今後もこのアルバイトと学業の両立は求められる課題の一つであり、啓発が必要であると考え。実際に本学で実践していることや、これからの提案を含めて述べていく。

① 入学時の保護者説明会等を活用した啓発講座

本学の学生の状況解説、学業とアルバイトの両立についてお知らせを行う(過去に一度行った経験がある)。多くの保護者が集う機会であり、効果的な時間お

よび時期である。

② 新入生オリエンテーション等に講義・ワークショップ等実施

本学では過去2度行ってきたが、年次も新しく早期の啓発が、これからのアルバイト探しの指標につながる有効な時間であると考え。

③ 労働関連の法律、学生としての権利を学ぶ

現在幾つかの科目で取り入れられ始めているが、学内統一の理解、支援体制の仕組みにまで持っていくことを期待したい。

④ 学生同士のピアカウンセリングの実施

アルバイト先にだまされるなどという一方的な教授法よりも、よりよい改善に向けて自ら歩き出す仕組みを学生同士により取り組む方が継続的な支援につながりやすい。授業は終了しても友人関係は継続する。これは筆者の授業の中で取り入れた際に非常に効果的であったが、全学的に取り組む、お互いに支えあう校風へつながることを期待したい。

⑤ 学生のSOSに対応できる支援チーム体制

教員、スクールカウンセラー、学生課、キャリア支援課と、時と場合によりすぐに支援チームを結成し、学生の本課題を解決できる仕組みが非常に重要である。学生の課題およびその効果的な対応に対する経験と情報の蓄積を行いつつ、効果的な支援につなげていくことが求められる。2015年度にアルバイトの過重負担で心身共につぶれそうになっていた学生(先ほどの聞き取りのAさん)を学内支援チームとして結成し、アルバイト先への現状の報告、改善の申し入れの後に、Aさんの勤務先は段階的な改善へ向かい、現在も働き続けている事例もある。泣き寝入り、つぶれる学生が悪いという状況の把握から見逃さない、大学として支援していくという基本姿勢を構築することが求められると考える。

5. 結論

本学学生へのアルバイト調査および聞き取りから、多くの学生が長時間勤務、厳しい労働環境下において学業とアルバイトの両立をしようと努力している。沖縄の経済や大学の学費の捻出、自己実現のための留学費用を稼ぐ意味でもアルバイトせざるを得ない状況にあるのも簡単に変えることのできない状況であるといえる。

本学学生の一つの特徴として、自身が従順にアルバイト環境の中で耐えて馴染もうとする姿がある。さらに労働者として当然に得られる権利や保障の知識が非常に乏しく、そういった学生の多くがアルバイト先の都合のよいままに働き続けて、学業に支障をきたし、本末転倒の状況下になっていくことが多々見受けられる。

不当な環境下で支える人や職場が沖縄の経済を回し、ブラック企業へと発展していくことが容易に想像できる。負のスパイラルであり、こうした状況が続く限り、学生の成長、沖縄の未来を作る人材が育つのは厳しいといえるだろう。授業の中で、本課題に取り組む際に学生が「ブラックなバイトは人をブラック化していく。ブラックな人が多くいる職場が結局はブラックバイトという環境を作っていく」というのをつぶやいていた。悲しいつぶやきであるが現実を言い当てているように感じた。

実際に本学ではこの課題に向き合い始めている。学科内での共有に加えて今後は学科を超えて学院全体、保護者を始めとして社会全体への大学の施政方針等を打ち出していくことが求められるだろう。優秀かつ学ぶ意欲を抱いて入学してきた本学学生の学業とアルバイトの両立支援はもちろんのこと、ブラックバイトでつぶれそうになっている学生を側面的に支援する体制づくりも併せて必要な取り組みであると考え。微力ながら筆者も、学生への追跡調査を始めとして、学内外の取り組み事例の収集、改善事例の効果的な検証を重ねていく予定である。

謝辞

本調査に関して、本学1年次の皆様および、聞き取り調査に3名の学生に協力頂いた。日々学内で見せている明るい姿の学生が、授業後にこういった環境下に置かれているのかと悲しい気持ちになることが多々あったが、沖縄の経済、学生の家庭環境と決して安泰ではない状況下においても学業と両立させたい、自己実現への思いを聞くことでこちらも大きな勇気を頂きこれからの継続的な支援をさらに約束したい。ご協力頂きました皆様へこの場をお借りして感謝を申し上げます。

註

- 1) 学生であることを尊重しないアルバイトのこと。
フリーターの増加や非正規雇用労働の基幹化が進む中で登場した。低賃金であるにもかかわらず、正規雇用労働者並みの義務やノルマを課されたり、学生生活に支障をきたすほどの重労働を強いられることが多い。
- 2、3、4) とともに、2016年沖縄キリスト教学院大学1年次「大学生アルバイト調査」結果
- 5) 予備校、学習塾に多い仕組みであるが、授業の時間のみ時給が発生し、それ以外の時間は給与を支払われない。

引用・参考文献

「社説」子の貧困解決を最優先に「琉球新報」2015年1月1日
2015年度 内閣府統計 子どもの貧困に対する統計http://www8.cao.go.jp/okinawa/3/kodomo-hinkon/shiryoku/okinawa_kodomo-genjou.pdf (最終閲覧日：2016年10月30日)

大内裕和・今野春貴(2015) ブラックバイト 堀之内出版
大内裕和氏(2014) ブラック企業のない社会へ 岩波ブックレット

厚生労働省ホームページ：学生アルバイトの労働条件の確保 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000108174.html> (最終閲覧日：2016年11月16日)

沖縄県統計資料ウェブサイトホームページ：沖縄県統計課「2011年度県民経済計算」<http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/youran/H28youran.pdf> (最終閲覧日：2016年10月30日)

独立行政法人、日本学生支援機構ホームページ：日本学生支援機構とはhttp://www.jasso.go.jp/about/ir/minkari/_icsFiles/afieldfile/2016/03/08/28minkari_ir.pdf (最終閲覧日：2016年10月30日)

沖縄県企画部統計課ホームページ：労働力調査(沖縄県)2016年1月分 <http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/lfs/2016/lfs201601.pdf> (最終閲覧日：2016年10月30日)

沖縄労働局ホームページ：『県内大学生に対するアルバイト実態調査を実施』～学生アルバイト実態把握のためのアンケート調査結果～ http://okinawa-roudoukyoku.jsite.mhlw.go.jp/library/okinawa-roudoukyoku/koyoukankyokintou/H28/H280929_gakuseiarubaito/280929_gakusei_toukei.pdf (最終閲覧日：2016年11月16日)

沖縄県キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学 学生募集要項(2015)

石田眞・竹内寿 監修(2014) ブラックバイト対処マニュアル 早稲田大学学生部学生生活課

今野春貴(2016) ブラックバイト - 学生が危ない 岩波新書

大内裕和(2016) ブラックバイトに騙されるな! 集英社クリイティブ

ブラックバイトユニオン <http://blackarbeit-union.com/cases/settle/index.html> (最終閲覧日：2016年11月16日)

鈴木絢子、大内裕和(2014) ブラックバイトへの対処法 ブラック企業対策プロジェクト

ブラックバイトと闘え/学生ら労組結成「琉球新報」2014年4月16日21頁

ブラックバイト/不当扱い、学業に影響「琉球新報」2016年4月19日17頁

沖縄労働局調査/4人に1人「学業に支障」http://okinawa-roudoukyoku.jsite.mhlw.go.jp/library/okinawa-roudoukyoku/koyoukankyokintou/H28/H280929_gakuseiarubaito/280929_gakusei_toukei.pdf (最終閲覧日：2016年11月16日)

Study Based on the Results of Survey on University Students and Their Part-time Jobs Reconciling Students' University Life and Part-Time Jobs

Naomi Tamashiro

Abstract

This study is the compilation of a conclusion reached from the results of two surveys. The first is based on results from a questionnaire survey entitled "Survey of University Students and Part-Time Jobs," which was conducted in May 2016, to ascertain the realities of university students' part-time employment. Also, in conjunction with this questionnaire, interviews were conducted with students who had experienced working in a difficult part-time labor environment and actually approached the author for consultation. An attempt was made to come to a better understanding of what university students are truly thinking and the serious situations in which they find themselves, factors which form the background leading to the results of the aforementioned written questionnaire. The analysis conducted combining both facets clarified the realities that university students face in their part-time jobs and showed a means toward reconciling students' university life and their part-time jobs.

Moreover, the investigation also examined occupation types, working hours, hourly wages and other labor conditions as well as the economic circumstances of students' households, availability of assistance from households, receipt of any scholarships and other elements making up the students' environment. Based on these survey results, proposals were examined for improving the current situation. Lastly, an inquiry was conducted of what faculty members are able to do, common issues that should be addressed within the university, and elements that should be dealt with in terms of the Okinawan labor environment.

Keywords : university students & their part-time jobs, exploited part-time workers, scholarships, poverty